様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６３１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２０７２７

研究課題名（和文）近代イランの地主と農民

研究課題名（英文）Landlords and Peasants in Modern Iran

研究代表者
山口　昭彦（YAMAGUCHI, Akihiko）

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：５０３０２８３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,400,000円、（間接経費）　1,020,000円

研究成果の概要（和文）：イランの中でもとくにクルド系住民が多数を占めるイラン西部に焦点を当て、近世から近代にかけての政治・社会変動を踏まえながら、地主＝農民関係の変容を解明するための基礎研究を行った。まず、当時この地域を支配していたクルド系諸侯とイラン中央政府との関係がどのように変化し、そのことが在地社会の権力構造にどのような影響を与えたのかを検証した。さらに、一クルド系在地エリートによる不動産集積の実態とその意図を明らかにし、彼らと彼らが所有する村落住民との関係について一定の推論を行った。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the western part of Iran where the Kurdish population have been dominant, we tried to outline the historical background to the transformation of landlord-peasant relationships from the early modern period to the modern period. Firstly, we examined how the central government endeavored to incorporate the Kurdish local rulers into the state political system and how such integration policies affected the local power structure in Kurdistan. Then, we revealed a detailed picture of the land acquisition of a Kurdish local notable and pointed out their strategies and motivation of property accumulation. Moreover we proposed a hypothesis on the relations between the elite family and the peasants living in the villages they held.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：イラン　クルド　農村

１．研究開始当初の背景

イラン史研究において、社会経済史研究、とりわけ農村や遊牧民をも含んだ形での社会経済史研究は概して低調であり、そのため経済史的な観点からイラン史の展開を説明する理論的モデルはいまもって示されていない。比較的史料の残る都市に関する研究が進む一方、農村や遊牧民は「後背地」として捉えられるだけで、それ自体に対する十分な関心が寄せられることはなかったのである。

かかる状況に鑑み、かつて研究代表者は、18 世紀初頭にオスマン朝によって作成された納税台帳（検地帳）を使って、イラン西部の都市、農村、遊牧民について、それぞれの規模や生業形態、また相互関係などを分析した。イラン史研究においては、それまで試みられることのなかった研究であり、学界への一定の貢献を果たすことができたと考えている。

しかし、それらは納税台帳であるが故に、個々の事例についての深い分析にはいたらなかった。検地帳はあくまでも徴税目的に作成されたものであり、網羅的に集落や遊牧集団を記録してはいても、農民の生活や生業に関する具体的な記述には乏しく、したがって、農村社会の実態、とりわけ地主と農民との関わりなどはほとんど明らかにすることができなかった。そのため、本来、当該地域における農村社会の実態を十分に把握した上で行うべき検地帳の解釈もまた、不十分なままにとどまらざるを得なかったのである。

さらにいえば、こうした社会経済状況の把握には、その背景をなす、当該地域（イラン西部）における政治・社会的環境とその変化についての理解が不可欠であるが、残念ながら、これまでの研究では、こうした政治・社会的変化の解明も十分に進められてこなかった。

そこで、本研究では、研究代表者によるこれまでの研究成果を生かしつつ、当該地域の政治・社会状況を踏まえた上で、土地所有の実態や地主＝農民関係、その歴史的変容を解明することを目指した。

２．研究の目的

文書史料などを用いて、イラン西部、とりわけクルド地域における在地エリートによる土地集積やそれに基づく地主＝農民関係の変容を具体的な事例に沿って解明することを目的とし、具体的には、クルド系諸侯のひとつ、アルダラーン一族が、ときの中央権力から一定の自立性をたもちつつ、自らの所領として代々統治していた地域を対象とした。なかでも、アルダラーン家に仕え、とくに 19 世紀に入る頃から名家として台頭するヴァズィーリー一族に焦点を当て、彼らを在地エリートへと成長させた歴史的背景を解明したうえで、彼らがどのように不動産を獲得し、管理したのか、また近代という時代の中で彼らが所有する村落がどのような変容を遂げたのかを明らかにすることを目指すこととした。

ヴァズィーリー家に注目したのは、同家の残した文書史料などが多数残されているからである。

３．研究の方法

主な研究の方法は、対象地域での実地調査、資料収集、分析からなる。

（１）実地調査として、イラン西部のクルド系住民が多数を占めるコルデスターン州やそれに隣接するケルマーンシャー州やハマダーン州などの各地を可能な限り訪問し、都市のみならず農村やその周辺の耕作地や河川の広がりなど、景観上の特徴を確認した。

（２）史料としては、イラン各地の図書館・文書館（国立公文書機構・図書館、宗教寄進・慈善庁、文化遺産局サナンダジュ支部など）、また、トルコにある首相府オスマン文書館などで関連文書を収集した。

（３）分析の論点としては、主に以下のようなものを設定した。

①ヴァズィーリー家が台頭する政治的背景を探るために、サファヴィー朝期からカージャール朝期にかけてイラン西部、とくにアルダラーン家と歴代イラン王朝との関係とその変動を分析することを目指した。幸い、アルダラーン家が代々支配したアルダラーン地方については、18 世紀以降、盛んに地方史が著されている。これらをもとに、ヴァズィーリー家が 19 世紀以降、在地エリートとして台頭する政治的社会的背景を検証することとした。

②近代における地主＝農民関係の変化を検証するにあたり、まずは近世における実態を解明する必要がある。そのため、適当な事例をとりあげて、当該地域の在地エリートがどれほどの規模の不動産をどのような形で集積・所有していたのかを明らかにすることを目指した。

４．研究成果

（１）近代における当該地域の地主＝農民関係を検証するにあたり、近世以降の政治・社会的変動を検証した。

①16 世紀のサファヴィー朝成立後、イランに組み込まれたクルド地域を統治していたクルド系諸侯（とくにアルダラーン家）と中央政府との関係を多面的に検証した。具体的には、16 世紀から始まったイランへの統合は紆余曲折を経つつも徐々に進展し、王朝が交代しても、クルド系諸侯と歴代イラン王家との結びつきは強まり、その結果、中央政府の支配が在地社会に深く及ぶようになったこと

を論証した。

②さらに、19 世紀半ばになると、アルダラーン家が総督職から排除され、王族が総督に任じられるとともに、かつてアルダラーン家を支えていた官僚名家が急速に台頭し、在地エリートを代表するようになったことを示した。

以上の考察を通じ、この地域の近世＝近代移行期の政治変動について大まかな見取り図を提示することができた。

（２）また、近代に入る以前の地主＝農民関係を確認するため、サファヴィー朝期末期における一クルド系名家のもっていた不動産に関わる文書や、同家が各地に設定した宗教寄進（ワクフ）に関わる文書を発見し、それらの分析を通じて、かれらがどのような形で、またどれほどの規模の村を所有していたのかを明らかにした。

その結果、これまでイラン史においてしばしば指摘されてきたような、複数の地主による村の共同所有ではなく、当該一族が村を一括して所有しようとする意図が明白であることを証明した。また、これまでの研究では、上記のように共同所有が一般的であるために、農業開発へのインセンティヴが働きにくいとされてきたが、その前提が必ずしも妥当ではないことも指摘した。

従来の研究では、史料的な制約のため、在地エリートがどの程度の不動産を所有していたのかさえ明らかではなかったが、本研究によって一つの有用な事例を示すことができたと考える。

（３）今後の展望として、この研究を通じて収集した膨大な文書史料を用いて、さらに事例研究を発表していきたいと考えている。とくに、ヴァズィーリー家の文書群については、分析すべきものがいまなお数多く残っており、本研究で明らかになった政治・社会的環境を踏まえ、また上記に示したような、前近代における土地所有に関する事例とも比較しながら、その不動産所有の実態を解明し、地主＝農民関係の変化についても検証していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　４件）

① 山口昭彦「サファヴィー朝（1501-1722）とクルド系諸部族：宮廷と土着エリートの相関関係」『歴史学研究』、査読無、885 号、2011 年、157-166 頁。

② Akihiko Yamaguchi, “Shah Tahmasp's Kurdish Policy,” Studia Iranica, 査読　有, 41 (2012), pp. 101-132.

③ Akihiko Yamaguchi, “İran Kürdistanı’nın Safeviler Dönemindeki Kısa Bir Tarihi,” Kürt Tarihi, 査読無, 7 (Haziran-Temmuz 2013), pp. 28-33. [「サファヴィー朝期イラン・クルディスターン小史」『クルド史』]

④ 山口昭彦「後期サファヴィー朝有力家系の戦略的資産形成：ザンギャネ一族の「財産目録」を手がかりに」『アジア・アフリカ言語文化研究』、査読有、86 号、2013 年 9 月 30 日、31-54 頁。

〔学会発表〕（計　10 件）

① Akihiko Yamaguchi, “Shāh Tahmāsb’s Kurdish Policy,” The Eighth Biennial Conference of the International Society for Iranian Studies, Santa Monica (USA), May 29, 2010.

② 山口昭彦「サファヴィー朝（1501-1722）とクルド系諸部族：宮廷と土着エリートの相関関係」2011 年度歴史学研究会大会・合同部会、早稲田大学、2011 年 5 月 22 日。

③ Akihiko Yamaguchi, “Political and Economic Integration of Iranian Kurdistan into Safavid Iran,” The Seventh European Conference of Iranian Studies, Jagiellonian University, Krakow (Poland), September 10, 2011.

④ 山口昭彦「サファヴィー朝の多民族統合と移住政策：クルド系諸部族の東部移住をめぐって」日本オリエント学会第 53 回大会、ノートルダム清心女子大学、2011 年 11 月 20 日。

⑤ Akihiko Yamaguchi, “Iran’s Kurds (Akrād-e Īrān) in Sharaf-nāme: Safavid Integration Policy and Forced Relocation of Kurdish Tribes to Khorasan,” Konferentsii po kurdovedeniju Treti <Lazarevskie chtenija>（「クルド研究会議：第３回ラザレフ記念連続講演会」）, Institute of Oriental Studies, Moskow (Russia), May 14, 2012.

⑥ Akihiko Yamaguchi, “Settlement Patterns and the Religious Composition of Early Eighteenth-Century Iran According to Ottoman Fiscal Surveys,” The Ninth Biennial Conference of the International Society for Iranian Studies, Istanbul (Turkey), August 2, 2012.

⑦ 山口昭彦「宮廷と辺境を媒介する：クルド系諸部族の統合とザンギャネ一族」（企画セッション「サファヴィー朝の 200 年–変化とダイナミズム」）、日本オリエント学会第 54 回大会、東海大学湘南キャンパス、2012 年 11 月 25 日。

⑧ 山口昭彦「周縁から見る『イラン』の輪郭形成と越境：一クルド系名家の軌跡から」新学術領域研究総括シンポジウム『ユーラシア地域大国の比較から見える新しい世界像』早稲田大学国際会議場、2013

年１月 26 日。

⑨ Akihiko Yamaguchi, “Mediating between the Court and Kurdistan: the Zangane Family under the Safavid State,” Kurds and Kurdistan in Ottoman Period, Salahaddin University, Erbil (Iraq), April 16, 2013.

⑩ Akihiko Yamaguchi, “The Safavid Legacy as Viewed from the Periphery: The Ardalan and Iran’s Shahs,” International Conference "Mapping Safavid Iran" at ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, November 30, 2013.

６．研究組織

(1)研究代表者

山口　昭彦（YAMAGUCHI, Akihiko）
聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：５０３０２８３１